

学校経営のポイント

初優勝の済美支えた“打撃力”に学ぶ

若井 彌一

「春は選抜（野球）から」と言われる第76回の選抜高校野球大会は、4月4日、甲子園初出場の済美高校が伝統校の愛工大明電高校を接戦の末6:5で下し、初優勝するという劇的な幕切れとなった。

頂点に立つには“土台の鍛え”が不可欠

甲子園に春夏の大会を通じて初出場のチームが優勝したと聞くと、なかには「まぐれ勝ちによるまぐれ優勝」という印象をもつ人がいるかもしれない。たしかに野球であれサッカーであれ試合には“運”とか“ツキ”と呼ばれるものを感じさせる場面がいくつもある。

しかし、実力の差が明白である鍛えの足りないチームに“運”は味方しない。“運”はふだんの地道な練習による鍛えに対する「勝利の女神」からのご褒美というように意味づけをしておくとう理解しやすい。

今回の大会で、そのことを実感させたのが、済美高校と東北高校の一戦（準々決勝）であった。試合は、済美が逆転サヨナラホームランによって4点差を覆して勝利した。おそらく、今大会のなかでも最もドラマチックな試合であったと思われる。

野球のチームで勝ち残る場合にも、いわゆる攻め（打撃）のチームと守り（投手力と守備力）のチームがある。

済美の場合は、攻めのチームである。戦績を見ても、1回戦（対土浦湖北）9:0、2回戦（対東邦）1:0、準々決勝（対東北）7:6、準決勝（対明德義塾）7:6、決勝（対愛工大明電）6:5であり、2回戦を除く4試合は、鍛えられた打撃力が開花しての勝利であった。

済美高校は、まだ創部3年目という初々しいチームであるが、このチームを指導する上甲監督は、高

校野球界では知られた存在であり、この監督は、一球の大切さ、キャッチボール、打撃練習で一球をおろそかにしない精神をふだんの練習で選手にたたき込んだという。

筆者も、選手、監督、部長、大学野球組織の役員（北信越大学準硬式野球連盟会長、全日本大学準硬式野球連盟評議員）と、長らく野球に関わりをもってきたが、「伸びるチーム」を育てるには、ふだんの練習において「一球をおろそかにしない」をいかに徹底できるかが大きな鍵となる。

“目標意欲”と“取組みの工夫”を促す

これは野球だけに通用することではなく、児童・生徒の学習活動にも通用する。小学校の学級担任、中・高等学校の学級担任、教科担任は、野球チームの監督に喩えることができる。

「一球（毎時間の学習）をおろそかにしない」ことの大切さを、児童・生徒の「自発的精神」（教育基本法第2条）に支えられた実践とすることができるか。そして、日々の学習活動のなかに、それぞれの児童・生徒がより効果的な学習（練習）を考え、工夫を重ねることの楽しさと充実感を見出すことができるように、個々の児童・生徒の学力、知的関心の実態、学習のスタイルなどに配慮しながら適切な指導・助言をしていくことができるか、が監督としての基本的な課題である。

そして、校長・教頭は、そのような基本的な課題に全教職員が自覚的に挑戦できるように、教職員を激励し、校内研修の充実を図る等に腐心していただきたい。

（わかい・やいち = 上越教育大学教授）

★好評発売中！

B5判 210頁・2500円★

改訂学習指導要領 全文と要点解説

●新刊案内●

最新刊！ 好評発売中

教育開発研究所刊

改革の流れを的確に整理！ 最新の資料と演習により“教育新時代”の経営課題を探る

『教職研修 '04 情報版』 菱村 幸彦（国研名誉所員）監修
B5判 270頁・定価 2625円

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください（24時間受付・即日発送）